

小学生の体育学習への動機づけに関する研究

伊藤, 豊彦

<https://doi.org/10.15017/2348718>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (教育学), 論文博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名 : 伊藤 豊彦

論文題名 : 小学生の体育学習への動機づけに関する研究

区 分 : 乙

論 文 内 容 の 要 旨

【研究の背景と目的】

学校体育が抱える問題点として、子どもの体力低下傾向や運動する子どもとそうでない子どもの二極化傾向に対する対応の必要性（中央教育審議会，2016）が指摘され、現行の学習指導要領の改善の具体的事項として、「すべての児童が、楽しく安心して運動に取り組むことができるようにし、その結果として体力の向上につながる指導等の在り方について改善を図る。その際、特に、運動が苦手な児童や運動に意欲的でない児童への指導のあり方について配慮すること（文部科学学習，2017）」が求められている。したがって、教師にとって、どのようにすれば子どもの学習意欲を高めることができるのかという問題は学校体育が抱える問題の解決のため極めて重要な課題である。

ところで、心理学では、学習意欲を動機づけの問題として扱い、人間の多様な行動の理由やその生起メカニズムを解明することを目的に、これまで多くの有益な知見が蓄積されてきた。しかしながら、授業実践への貢献という観点からこれまでの体育における動機づけ研究をみると、これまでの学習意欲にかかわる理論が「二項対立的発想」、「要素主義」、および「量的側面」重視であることから択一的な心理的メカニズムで説明されることになり、授業実践場面における動機づけを支える多様な学習動機とそれらの統合的構造を捉えきれていないという課題がある（鹿毛，1999）。また、日々の授業における学習は、教師の指導や仲間との相互作用の中で行われるダイナミックなプロセスであり、動機づけに及ぼす学習環境要因の影響を検討することが欠かせないにもかかわらず、学習環境要因と動機づけとの関連について十分な検討がなされていないのが現状である。

そこで本研究では、小学生の体育学習への動機づけを改善するという視点から、授業実践場面を重視したボトムアップ的な観点から学習動機を特定し、それらの統合的な構造を検討することを通して、体育学習への動機づけの個人差を明らかにすることを第1の目的とする。さらに、これまでほとんど検討されてこなかった動機づけの基本的条件と考えられる学習環境要因を取り上げ、学習動機と動機づけに及ぼす影響を明らかにすることを第2の目的とした。

【結果の概要】

1) 児童の体育学習への動機づけは、「実用志向」、「優越志向」、「承認志向」、「充実志向」、「集団志向」、および「成績志向」の内発的動機から外発的動機を含む6つの多様な学習動機に支えられていることが明らかとなった。また、6つの学習動機の統合的な構造、すなわち横断的な個人差をクラスター分析によって検討した結果、「無動機型」、「関係依存型」、「成績不安型」、「平均型」、「成績重視型」、「自我関与型」、「課題関与型」、および「統合型」という8つの学習動機類型（プロフィール）に分類できることが明らかとなった。さらに、6つの学習動機を下位尺度とする体育における学習

動機測定尺度を作成し、信頼性と妥当性の検討結果から、体育学習への動機づけを診断・評価することができる尺度であることが確認された。(研究1、研究2、研究3)

2) 体育学習への動機づけの基礎的条件と考えられる3つの学習環境要因を取り上げ、動機づけとの関連を検討した。まず、体育授業場面における動機づけ構造を取り上げた研究4では、「挑戦的環境」、「規範の欠如」、「脅威的環境」の3因子が抽出され、学習動機、学習方略などとの関係を重回帰分析によって検討した結果、挑戦的な学習環境は動機づけを高める方向で影響するのに対して、脅威的な学習環境は動機づけを低下させる方向で影響することが明らかとなった。

つぎに、体育学習場面の動機づけ雰囲気を取り上げた研究5では、「熟達雰囲気」、「協同雰囲気」、および「成績雰囲気」の3つが抽出され、学習動機および学習方略との関連を構造方程式モデリングによって検討した結果、熟達雰囲気が協同雰囲気が体育学習への動機づけを高めるのに対して、成績雰囲気は体育学習への動機づけを抑制することが明らかとなった。

最後に、教師の自律性支援的行動を取り上げた研究6では、児童の心理欲求の充足を促す教師行動として「一般的学習支援」、「有能さ支援」、および「自律性支援」の3つの行動を特定し、学習動機および動機づけ指標との関連を構造方程式モデリングによって検討した結果、一般的学習支援と有能さ支援を行うことが児童の学習動機を高めることを通して、体育学習への動機づけを高めることが明らかとなった。

【まとめ】

本研究を通して、小学生の体育学習への動機づけにおける個人差の理解と体育学習への動機づけを高める学習環境のあり方について、一定の知見が得られた。

まず、体育学習への動機づけは内発的動機から外発的動機を含む多様な学習動機に支えられているとともに、それらの多様な学習動機は個人の中で統合され、個人差を形成していることが明らかとなった。したがって、体育学習への動機づけを高めるためには、個人差、すなわち学習動機が個人の中で統合されている状況に応じた指導の必要性が示唆された(第3章)。

つぎに、学習環境要因と動機づけとの関係では、動機づけ構造としての挑戦的な環境づくり、動機づけ雰囲気としての熟達雰囲気と協同雰囲気の創出、教師行動としての一般的学習支援と有能さ支援の重要性が示唆された。これらのことから、体育学習への動機づけを高めるためには、個人内要因への働きかけと同時に、適切な学習環境を創出することが有効であり、適切な学習環境の創出は体育学習への動機づけを高める基本的な条件であることが示唆された(第4章)。

【今後の課題】

1) 本研究では、学習動機の統合的構造による個人差を明らかにすることができたが、個人差に応じた指導を考える場合、そのような統合的構造にみられる個人差がどのように形成されるのかという問題が残されている。今後は、多様な学習動機に支えられた個人差がどのように形成されていくのか、その形成プロセスを発達の観点から検討する必要がある。

2) 本研究では、体育における学習動機と動機づけに影響する環境要因の検討を通して、教師が体育学習への動機づけを改善するための有益な知見を提供することができたが、学習環境要因に介入し動機づけへの効果を検証するまでには至らなかった。したがって、今後は、介入研究を通して、本研究の実践的有用性を検討していく必要がある。また、学習動機の統合的な発達に向けた学習環境要因のあり方については検討できていないため、学習動機の統合的発達を支援するために必要な学習環境のあり方やそのメカニズムを解明していくことが必要である。